

第35回 海外子女文芸作品コンクール

海外子女教育振興財団「地球に学ぶ」掲載作品

作文の部

読売新聞社賞

「言葉の不思議」

小六 山口 りあ

この間、補習校の宿題として物語作りをしました。その宿題とは、教科書に残っている写真を元に、「自由に物語をふくらませていく」というのもでした。その時にふと、気づいたことがあります。それは、日本語と英語との大きなちがいについてでした。

私にとって物語を日本語で書くのは、今回が初めての経験でした。ニュージーランドの学校には、毎日のように、ライティングという授業があります。物語を作ったり、週末をふり返ったりして、先生の指導を受けながら自由に書きます。でも、そんな授業は補習校にはありません。「書く」といったら、作文か読書感想文くらいしか知りません。逆に、現地校では、高校生になって初め

て、作文の書き方を習います。だから私は、英語での作文は、たった一、二回の経験しかありません。

私は、自分自身が物語を書くときは、実際に字や文章は日本語でも、頭の中は英語で考え、物語を作りだし、それから、ほん訳することが多いと分かりました。その頭の回転で、最も難しかったり、やりにくかったことがいくつもありました。例えば、語いの順序。「きのう、私は、自分で弁当をつくった。」これを英語になおすと、「ワタシ、ツクッタ、ベントウ、ジブンデ、キノウ。」となります。このように、日本語と英語には、文法や語いの順序の合わないところなどが、たくさんあります。特に、英語には、たくさんの意味をもつ言葉が多く、連結語もあり、ぴったり意味が合う日本語をさがすのが大変です。

それに対し、日本語には、とても便利な漢字があります。漢字それぞれに意味があるため、短い文章の中で、より深い意味を書き表わすことができ、大変良いものだと思います。

さて、英語にも、日本語や他の言葉と同じように、便利なところがたくさんあります。その中で、最も便利の一つは、英語は「世界共通語」のように、多くの国で通じる上、世界中の人々と会話できるという、とても良い点です。

今回、日本語で物語を書いたことで、これらの日本語と英語とのちがい、または似ているところについて、自

分なりに考えたり、調べることができました。それによつて、さらに、新しい疑問がうかんできました。

その新しい疑問の中で、最も不思議に思ったのは、発音についてです。「その人の出身国によつて、なぜこんなに大きく、発音がちがうのだろう。」と不思議に思います。

例えば、ニュージーランドで生まれ、英語を使つて育つた父。日本で生まれ、日本語を使つて育つた母。そして、両方を使つてニュージーランドに育つ私。皆、英語を話すときの発音がちがいます。父と私は、ふつうのネイティブの発音ができます。でも母は、「ア」と「エ」の音をまちがえたり、日本語にはない、「Fh」の音が言いにくく、そのうえ、舌がうまくまわらなかつたり、文法が悪かつたりして、よく「パードン」とききかえされたりなど、そんな苦労をしている姿を何度も見たことがあります。このような今までの体験を思い返していくうちに、「なぜ、言葉がちがうとうまく発音ができず、ヒアリングも悪いのだろう。」と不思議に思うのです。その理由とは、出身国はちがつても、人間は皆人間であり、体の中は同じ働きをしているのに、言葉だけはちがいます。元々の生活でできなれていない音、使つたことのない音を使うことが難しかったりするのはいまがながない。しかし、同じ世界でくらす、同じつくりの人間がなぜこんなに発音がちがうのか、とても不思議でしかたがありません。

それでも、英語を母国語としている国にくらす私は、とてもめぐまれた立場にあると感謝しています。なぜなら、英語を使えるということは、世界中の多くの人々とやり取りができるということがとても幸せだと思うからです。またヒアリングや発音が十分にできなくても、文法をきちんと勉強することで、文章で相手に気持ちを伝えることができる、学びました。

これらのことが不安なくできるように、一生懸命勉強することは、とても大切だと思います。ですから、これからも、英語と日本語の両方を最後まで勉強し、しよう来、こまらないようにしたいと思います。それと同時に、最近現地で習い始めたフランス語の勉強も、もっと世界が広まると思うと、心がわくわくします。

毎日のくらしに言葉を使わない日はありません。ですから、私が一生懸命勉強したら、もっと言葉をおぼえ、世界がより身近になると思います。私は、これからも、言葉の勉強をがんばり、言葉の不思議を探っていきたいです。

優秀賞

「マオリビーチ」

小二 蔵ヶ崎 惺士

このあいだ、ゆうたくんとあやねちゃんといっしょにアカロアにいきました。ゆうたくんは、ぼくが日本の小学校にいったときの一ばんなかよしのともだちでした。こんどは、ゆうたくんがえいごのべんきようをしに、ニュージーランドにきました。

あさ早くおきて、車にのりました。ぼくのパパがうんてんしました。車の中で、みんなでゲームをしました。そのゲームの名まえは、アイスパイといいます。

そのあと、マオリビーチにきました。そこには、大むかしマオリのおしろがありました。でも、いまは、なにもありません。おしろのかいだんみたいなものはあつたけれども、草がはえていて土がすべりやすかったです。

マオリは、むかしからニュージーランドにすんでいる人たちです。

マオリビーチには、貝がたくさんありました。ママが、「あさり貝としじみ貝ね。おみそしるにしたら、おいしいそう。」

と、言いました。ぼくは、たべたことがないです。こどもがたべると、おいしくないとおもいます。

ゆうたくんが、石の下にかにをいっぱい見つけました。ぼくは、小さくてきれいな貝がらを見つけてひろいました。でも、ママが、

「もってかえったらだめだよ。」
と、言いました。

どうしてかと言うと、マオリビーチにあるものは、ぜんぶマオリのものだからです。だから、貝がらも石もかにももってかえったらつかまってしまうのです。

でも、カメラがビーチにないのに、なんでとつたらわかるのかなとふしぎにおもいました。

もし、だれかがぼくのたからものをとつたら、ぼくはかなしくなります。それといっしょだとおもいます。ぼくが貝がらをだまってもってかえったら、マオリの人たちもかなしくなるとおもいます。だから、ぼくもゆうたくんもなにもとらなかつたのです。

こんど日本にいったら、ゆうたくんのママがビーチにつれていってくださいます。そうしたら、かせきやカブトガニを見てみたいです。

優秀賞

「トゥースフェリー」

小四 ハウデン えみり

「歯がぬけた。」

わたしはさげびました。ズーつとぐらぐらしていた歯がやつとぬけました。わたしが五才の時のことです。

わたしは、いそいでお父さんのいるところに行って行きました。お父さんが、

「まくらの下においとけば、トゥースフェリーが来るんだ。」と言いました。

わたしは、

「そして。」と聞きました。

「そしたら、トゥースフェリーが来て歯をもっていつて、かわりにお金をくれるんだ。」

と言いました。

ニュージージーランドでは、歯がぬけたときにまくらの下においておくと、ねているあいだに、歯をもっていつて、お金をまくらの下におきます。これをしてくれるのは、トゥースフェリーと言う歯のようせいです。

わたしは、いったいどんなトゥースフェリーなのか見てみたくてたまりませんでした。トゥースフェリーのすがたをなん度もそうぞうして楽しみました。

わたしは、お金のことだけを考えていました。わたしの歯がたくさんぬけたら、お金持ちになるな—と思っていました。

日本ではどうなるのかと思ったので、お母さんに聞いてみることにしました。

お母さんは、

「日本では、下の歯がぬけると、上にながて、上の歯がぬけると、下になげるのよ。」

そしてお母さんは、

「わたしが子どもの時は、ぐらぐらの歯があると、お父さんが歯に糸をつけて、ひっぱられたんだよ。」

と言いました。

わたしは、自分の歯が糸でぐいぐいひっぱられるすがたを想像するとその時生まれていなくて本当によかったなと思いました。

わたしは、他の国でも、同じことをするのかなあと思いました。

けつきよくわたしの歯はたくさんぬけかわり、トゥースフェリーから六ドルのおこづかいをもらいました。

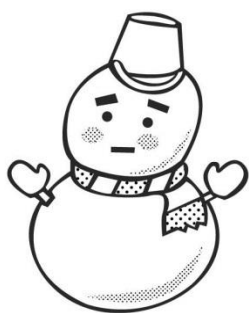
五才のわたしは、ニュージールランドでは、お金をもらうから、日本よりいいなとずっと思っていたのです。

だけど大きくなってから、本当は、お父さんと、お母さんがお金をくれると分かっていたがっかりしました。でも、子どもは、ふつう、みんな歯をぬくときはいやな気持ちになるから、トウースフェリーのお話しがつくられたと思います。

また、世界中の国々に、どんなトウースフェリーの物語が言い伝えられているのか調べてみたいと思います。

俳句の部

優秀賞



手ぶくろをあわててさがす雪の朝

小六 グレイ まや

第35回海外子女文芸作品コンクール受賞者

作文の部

読売新聞社賞

小六 山口 りあ

優秀賞

小二 蔵ヶ崎 惺士

優秀賞

小四 ハウデン えみり

佳作

小二 生方 オデイ

佳作

小四 河野 愛奈

佳作

中一 新田 七望

俳句の部

優秀賞

小六 グレイ まや